

PREVENTION No. 180

平成19年8月16日開催

兵庫県 阪神北圏域 中学生のためのアルコール対策推進事業の取り組み

兵庫県宝塚健康福祉事務所健康増進課 佐々木 初美

1. はじめに

兵庫県は10保健医療圏域に分けられており、阪神北圏域はその一つである。阪神北圏域は兵庫県の南東部に位置し、4市1町（伊丹市・宝塚市・川西市・三田市・猪名川町）からなっている。周辺地域は神戸市・大阪府に隣接している地域もあり、交通機関等も発達しているため、大阪府・阪神地域各都市との経済的・生活的結びつきが大きい地域である。

今回、阪神北圏域では、阪神北健康ひょうご21大作戦のアルコール対策の一環として、初めて中学生を対象にアルコール対策推進事業（阪神北県民局地域戦略推進事業*）を取り組んだので、その経過を報告する。

*地域戦略推進事業…地域固有の課題解決に向けた事業で、調査・検討・研修会等の多岐にわたる。県民局独自の判断で機動的に取り組める事業。

2. 主な取り組み

(1) 目的

未成年の早い時期から、アルコールに関する正しい知識の習得やアルコールに対する自己の体質を知ることにより、未成年者の飲酒及び成人後のイッキ飲みや過剰飲酒等の防止につなげる。また、アルコールについて学ぶことにより、将来に向けての生活習慣病予防の基盤づくりを図る。

(2) 事業主体

阪神北県民局（宝塚・伊丹健康福祉事務所）

(3) 対象

管内4市1町の中学校（各市町ごとに1校）

(4) 主な事業内容

①事前打ち合わせ

…前年度の取り組みや中学生のアルコールに関する意識調査等を報告し、現状の理解を得る。また本事業を学校行事（授業）のどう位置づけるか、どう取り組んで欲しいか等、健康福祉事務所と学校とのすり合わせを目的として実施。

②健康教育の実施

…講話により、アルコールに関する正しい知識やアルコールが未成年者に与える影響等の理解を深めるとともに、アルコールを勧められた時の断り方等のロールプレイの実施。アルコールパッチテストの体験等

③事業評価会

…事業実施に前後に実施したアンケート結果をもとに、関係者間における現状理解を深め、課題等を明らかにし、次年度の事業に盛り込んでいく。また市町等関係者への事業の周知を図る。

3. 実施状況

平成17年度 3校（参加数444人）、平成18年度5校（参加数1,430人）

(1) 中学生を取り巻くアルコールの状況（アンケート結果より抜粋）

①7割以上の生徒が、アルコールを口にした経験がある。

…全体の1,261人（71.6%）の生徒が、すでに一口でもアルコールを口にしてしている。男女比では、やや男子生徒の方が高い状況であった。

②アルコールを初めて口にした時期は、男女とも小学校5～6年生が最も多い。

…男女ともに、7割以上の生徒が小学6年生までにアルコールを口にしてしている状況にある。

③飲んだきっかけは、「家族が飲んでいる」が男女ともに最も多い。

…次に多いのは、好奇心・興味」のであり、その他には、「お茶・ジュースと間違えた」「正月のお屠蘇で飲んだ」「親から水だと言って飲まされた」等であった。

④この1ヶ月間に飲んだ日数は、0日 883人(70.1%)が最も多く、1日以上は367人(29.3%)であった。
…次に多いのは、1～2日 257人(20.4%)、3～5日 60人(4.8%)、6～9日 15人(1.2%)であった。
毎日飲んでいる生徒12人(1.0%)は男女とも各6人であった。

⑤この1ヶ月の飲んだ量は、一口ぐらい216人(59.9%)が最も多い。

…次に多いのは、ビール・チューハイ 350mlが23.7%、ビール・チューハイ 500mlが7.9%であった。

⑥アルコールの入手先は、「親から貰った」が最も多く、次いで「家の中で探した」であった。

⑦アルコールを飲むと害があると答えた生徒は、1,048人(59.5%)あるものの、「多少あると思うがたいしたことはない」「あると思わない」と容認的考えの生徒は628人(35.7%)と4割近くを占めている。

…アルコールを飲んだことのある生徒と飲んだことのない生徒では、飲んだ日数・量が少ない生徒ほど、「害があると思う」と回答した割合が高い。

⑧アルコールを飲むことについて聞かれたら、「飲むべきでない」と答えた生徒と「少しぐらいならいい」「飲んでもいい」と答えた生徒が約半々であった。

…アルコールを飲んだことのない生徒の方が飲んだことのある生徒に比べ、「飲むべきでない」と答えた生徒の割合が高かった。

⑨いっき飲みについては、1,343人(81.5%)の生徒が知っており、健康教育により1,556人(90.7%)の理解が得られた。

…将来のいっき飲みについては、198人(11.3%)の生徒が「すると思う」と答えている。アルコールを飲んだことのある生徒の方が、飲んだことのない生徒に比べ、「将来いっき飲みをすると思う」と答えた生徒の割合が高かった。

(2) 健康教育前後の意識変化(アンケート結果より抜粋)

①健康教育前に「飲むべきでない」と答えた生徒が881人(50.1%)であったのが、健康教育後に、アルコールを勧められたら「断る」と答えた生徒が917人(53.4%)に増加した。

②将来いっき飲みについては、健康教育前に「しない」と答えた生徒は846人(48.1%)であったのが、健康教育実施後は「断る」と答えた生徒が1,388人(80.9%)と増加した。

4. 効果

(1) 生徒に意識づけられたこと

- ・ アルコールは正しい飲み方が重要である。
- ・ 自分のアルコールに対する体質が理解出来た
- ・ 自分も相手も大切にすることが重要だ。
- ・ 「断る」ことの重要性
- ・ 保健委員会の活動に広げることで、自分たちの学びの再確認と他の生徒への普及啓発活動となった。

(2) 教師等関係者に意識づけられたこと

- ・ 予想以上に、多くの生徒が既にアルコールを口にしている実態が分かった。
- ・ 生徒がアルコールを口にしたり・入手したりするきっかけは、保護者等身近な大人が大きく関与している。
- ・ 保健委員会活動等生徒の自主的な活動が教師等への普及啓発の場となった。
- ・ 他の授業と関連づけることで、歴史等の授業での生徒の反応に変化が見られた。
- ・ 生徒はもちろん、保護者への働きかけの重要性を再認識した。
- ・ アルコールを口にしないかが、アルコールに対する意識に少なからず影響する。

5. 今後の課題と方向性

2年間の取り組みをまとめて、改めてアルコールが生徒の身近なものになっており、そのきっかけに身近な大人が大きく関与していることが明らかになった。

生徒をはじめ保護者や学校関係者が現状を把握し、相互に連携を図りつつより効果的なアルコール対策を推進していきたい。